



イネ紋枯病の発病進展に十分注意してください

近年、イネ紋枯病の発生が、県内の広範囲の水田で見られています。この原因として、気象温暖化の影響が考えられ、7～9月に高温で降雨量や降雨日数の多い発病好適条件があり、出穂後に本病の上位進展に適した条件で経過したことが考えられます。また、近年は、多肥や晩生の飼料用米など被害進展に適する栽培様式が導入されてきたこと、さらに、紋枯病の被害がほとんど問題にならなかった期間が長く続き、栽培中に本病の防除が実施されていなかったことも、発病増加や被害拡大に係わっていると推察されます。

本病は、被害株にできた菌核が翌年の伝染源となるため、一度多発生すると次作でも発病しやすい傾向があります。

収穫後、被害株に形成された菌核は圃場で越冬し、翌年の代かき時などに田面水に浮上します。そして、移植されたイネ株に付着し、発病に適した温度条件になると菌核から菌糸を伸ばして株元に感染します。感染拡大は菌糸で行われるため、密植や多肥栽培の茎数過多で発病しやすく、7～9月の高温や多雨で発病が進展拡大します。

一般的に、発病は6月下旬～7月上旬頃からみられ、はじめは下位葉鞘に病斑ができ、発病株が次第に増加（水平進展）します。その後、出穂期近く～出穂後から病斑は上位の葉鞘へ進展（垂直進展）していきます。この時、第3葉鞘より上位に病斑がみられるほど減収が大きくなり、また、強風雨や台風などで株が倒伏すると更に被害が甚大となります。

このため、前年に発病が多かった圃場や常発圃場、茎数過多や飼料用米など多肥栽培の圃場などでは、発病状況をよく確認して必要に応じた対策を実施してください。特に、出穂後に発病が上位へ進展する場合には、十分な注意が必要です。

<防除のポイント>

1. 防除時期は幼穂形成期～乳熟期にかけてと長期ですが、**発病後の早期、出穂前までに防除の方が効果的です。また、発病圃場では出穂後に発病好適条件が続けば上位に進展しますので、追加防除が必要になります。**
2. 発病斑は水際に近い下位葉鞘から発現し、次第に上位葉鞘に進展するため、薬液の散布は下位葉鞘にまでかかるよう丁寧に行います。
3. **前年に発病がみられた圃場では発病しやすい傾向があるため、特に注意して発病の確認と早期の防除を徹底します。**
4. 薬剤を散布する場合は、**収穫前日数に注意し**、また、周辺の早生品種などに飛散しないようにします。
5. 水田管理としての中干しを徹底して根張をよくし、適正な茎数の確保に努めます。また、出穂後は間断灌水（入水後は自然落水しながら2～3日湛水し、落水後は田面が湿っているうちに再び入水するサイクルを繰り返す）を継続します。
6. 湿田で発病進展している場合は、収穫期の落水を収量や品質に影響しない程度で早めにし、上位葉鞘への被害進展を抑制します。

表1 水稻生育中の紋枯病の主な防除薬剤 (令和4年7月13日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
モンカットフロアブル	1,000～1,500倍	収穫14日前まで / 3回以内	7
モンセレンフロアブル	1,500倍	収穫21日前まで / 4回以内	20
バリダシン液剤5	1,000倍	収穫14日前まで / 5回以内	U18
モンガリット粒剤	3～4kg/10a (湛水散布)	収穫45日前まで / 2回以内	3
クタジンP粒剤	3～5kg/10a	出穂7～20日前 / 2回以内	6

注1) ドローン等の無人航空機または少量散布専用ノズルを装着した乗用型散布機を用いる場合は、それぞれの農薬使用基準を遵守して使用してください。

注2) 粒剤の処理は田水深3cm以上の湛水状態でいき、ムラなく均一に散布し、少なくとも3～4日間は湛水を保ち、7日間は落水やかけ流しを行いません。なお、クタジンP粒剤は、多発生時には効果が劣ることがあります。

注3) 分類欄には、FRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。